

# モンゴル王権の基礎的研究

—『モンゴル秘史』所伝族祖神話の分析を中心に—

(概要)

ゲレルト  
格日勒図

2002 年 4 月

歴史上、モンゴル高原から起こり、歴代中華帝国と対抗した騎馬遊牧民族国家として、匈奴・突厥・ウイグル・キルギス・契丹・モンゴルなどを挙げることができる。これらの国々は、短期間に勢力を拡大し、中華帝国と争ったという共通の特徴を有しており、従来、その勢力の拡大と強勢の主因を騎馬軍団という機動性の高い軍隊に求める場合が多かった。確かに騎馬軍団の威力は誰も否定することはできないが、しかしそれは問題の一側面であり、主に、部族連合を基盤とする遊牧国家というものが創建された後における国家の行動に関わるものである。もし北アジア騎馬遊牧諸族の単于やハーンが自らの部族や周辺の諸部族を麾下に纏め得た力と、その支配を維持し得た力とは如何なるものであったのかという点を考慮すると、遊牧軍団の威力だけでは説明のつかない幾つの問題を考慮しなければならないのではないかと思われる。そうした問題の一つに単于やハーンの王権の問題がある。本論は、このような問題意識に基づき、『モンゴル秘史』所伝のチンギス・ハーンの族祖神話を徹底的に分析することによって、モンゴル王権の根本に関わると思われる問題を考察することを目的とするものである。

モンゴルの王権は、チンギス・ハーン (Činggis qayan) によるモンゴル国の建設や統治システム、それにまたモンゴル帝国の世界征服やその外交政策などさまざまな点に重要な影響を及ぼしただけでなく、その後の時代においても、重要な意味を持ちつづけた。従って、本論の目的が順調に達成され、モンゴルの王権の本質を明らかにすることができれば、これらの問題を考察するのに役に立つことは言うまでもない。

先行研究を見ると、モンゴルの王権に関する考察は、モンゴル高原の騎馬遊牧民族の王権という枠組みの中で、おおまかに間接的、断片的になされるにとどまり、その本質に関する詳細で徹底した分析は、管見の限り見出されない。現在、匈奴の単于、そして突厥ないし契丹のハーンのような騎馬遊牧民族の君主の源流はシャマンであり、それらの王は部族制社会初期においてシャマンであったという「君主＝シャマン」という考え方にに基づき、チンギス・ハーンをはじめ、モンゴルのハーンたちもシャマンであったと言い切る傾向が研究者の間に見られる。「君主＝シャマン」という図式は、匈奴の単于、突厥や契丹のハーンに当てはまると考えられるが、モンゴル王権の本質という観点からみた場合、モンゴルのハーンたちはどうであったのであろうか。これが筆者の考察したい問題の一つである。

チンギス・ハーンとその継承者たちであるハーンは、モンゴル帝国の創建にあたって自らを「天の子」(Tengri-yin köbegün) と称していたことが

多くの文献資料によって伝えられ、研究者たちの関心を集めてきた。研究者たちの中には、この「天の子」という表現と考え方がどこに由来するのか、なぜ彼らが自らを「天の子」と称しているのかという問題を考え、結論として「天の子」はチンギス・ハーンが1220年前後に中国の天子思想を導入したものであり、それは、如何にして相手方を畏怖せしめ、或いは如何にして自らを権威付けるかということを目的としていたと見なす見解が出されている。自らを「天の子」と称していることは、ハーンの王権を主張するためであるが、問題は「天の子」という考え方が本来モンゴルに存在せず、中国の天子思想を導入したものと考えることに何の問題もないのか、モンゴル王権の本質という観点からみた場合、このように見ることは妥当か、ということであろう。これが、筆者の考察したいもう一つの問題である。

チンギス・ハーンの王権に関しては、「統治権神授説」すなわち神がチンギス・ハーンとその後継者たちであるハーンに全地上の支配権を授けたとする説も述べられている。神とは明らかにテングリ(tengri)のことであるが、テングリとはモンゴルのシャマニズムにおいて如何なる観念であるのか、なぜそれ程の力をもつものとされているのかなどの問題に関する分析は、先学の考察に見られない。これもまた、筆者が検討したい問題の一つである。

モンゴルの王権に関するこれらの問題の存在は、筆者にモンゴル王権の本質と成立の問題をチンギス・ハーンの族祖神話の側面から分析することの重要性を考えさせる大きな理由となった。なぜなら、王というものは族祖神話と系譜を非常に重視するものであり、チンギス・ハーンとその一族もその例に漏れないと考えられるからである。その点にこそ、上記の問題を解明する重要な鍵があると思われる。つまり、チンギス・ハーン一族の出自は如何なるものかという問題を分析し、彼らの王権の成立とその本質の問題を明らかにすれば、先学の述べている以上のような見解に対する解答を、筆者なりに導き出せるのではないかと思われたからである。これが、本論文を執筆した筆者の動機であると同時に意図でもある。

本論文は、七つの章によって構成される。第一章の「チンギス・ハーンの祖先と祖先神話」では、まずチンギス・ハーンの祖先系譜に見られる血縁の断絶、そしてチンギス・ハーンの祖先の系譜に含まれる蒼き狼神話とアラン・ゴア神話を紹介した。次に、この両神話に関する主な先行研究を検討し、先学たちの考察に認められる妥当な点や問題のある点を指摘しながら、蒼き狼神話をチンギス・ハーンの祖先の系譜にどのように位置付け

るかという問題の重要性を把握し、指摘した。

第二章の「蒼き狼神話の位置付け」では、モンゴル部族、モンゴル民族全体の神話と位置付けられる場合が多かった蒼き狼神話が『モンゴル秘史』において一体どのような意図で記されているのかという問題に関する分析を行ない、それがチンギス・ハーン一族の「根源」を天に求めるためにあることを明らかにした。この結論を導き出す過程において、長い間議論が続けられてきた『モンゴル秘史』のモンゴル語原題問題に触れ、『モンゴル秘史』冒頭の「チンギス・ハーンの根源」という一句は、『モンゴル秘史』のモンゴル語原題ではなく、後続文の主語であるとすべきであるとの見方を示したが、この見方は長い間続けられた議論に決着をつけることになるのではないかと考えている。

第三章の「蒼き狼神話の構造」では、蒼き狼神話の主旨を明らかにするため、構造主義的観点から中央アジア、北アジア、東北アジアの諸民族の始祖神話とシャマン誕生神話との比較分析を行なったが、その結果、諸神話には四つの要素から構成される構造すなわち要素Ⅰたる天（上界の精霊、東西の天、西の天、天神、天帝、天界）に由来する要素Ⅱが要素Ⅲと結合（交配）し、要素Ⅳたる始祖・シャマン・支配者・英雄などを生み出すという〈基本構造〉が、共通して存在していることを明らかにした。そしてこのことから、諸神話がなぜ、要素Ⅳの出自を要素Ⅰに求めているのかという問題を考える必要が生じた。

第四章の「テングリの分析—神話構造における要素Ⅰの分析について」では、モンゴル高原の騎馬遊牧民族の間で匈奴の時代から崇拜されてきたテングリに関する分析を行なった。テングリという言葉に「物質的実在」と「精神的実在」の二つの概念が含まれていることが既に明らかにされている。騎馬遊牧諸族に重視されてきたテングリとは、これらのうち、<sup>こゝろ</sup>空としての「物質的実在」であるテングリではなく、彼らのシャマニズムにおける「精神的実在」の概念である。ところで、先行研究を見ると、テングリの、「神」、「天神」、「至上神」、「最高の存在」といった意味だけが重視され、「精神的実在」たるテングリに空間と場所すなわち天上界の意味があることが軽視されがちであった。それは、テングリ崇拜の背景に宇宙を重層的に三つの階層—天上界、地上界、地下界に分ける宇宙三界観という観念があることが考慮されなかったためであると思われる。筆者の考えによれば、このような宇宙三界観という概念が根底にあったからこそ、テングリという言葉が天上界と天上界に住む神々すなわち天神という二つの概念を含んだまま匈奴からモンゴルまで継承されたのである。そこで、天上界の

ない天神も存在しなければ、天神のない天上界も存在しないと考え、何れの神話も要素Ⅳを構成する始祖・シャマン・支配者・英雄が、このような意味での「テングリの子」（「天神の子」）であることを語るものに他ならないという結論を導き出した。

第五章の「蒼き狼と黄色い鹿の分析—基本構造における要素Ⅱと要素Ⅲについて」では、〈基本構造〉における要素Ⅱは、天上界に住む天神と地上界に居住する人間の交渉を実現する靈的存在であり、要素Ⅲは要素Ⅱを通じて要素Ⅰの天神の意志を受け入れ、「天神の子」たる要素Ⅳの始祖・シャマン・支配者・英雄を産ませる或いは産むという役割を果たす地上界における受け手であることを明らかにした。つまり、要素Ⅳの始祖・シャマン・支配者・英雄が「天神の子」であることを信じさせるため、要素Ⅱと要素Ⅲを挿入したということである。これによって歴史上の人物とかトーテム動物とかと見なされる場合が多かった蒼き狼神話における蒼き狼は、靈的存在が動物の形をとるというシャマニズム的観念による獣形靈であることを明かにした。

第六章の「系譜上の血縁の断絶とその正統化」では、ボルジギン・オボグの始祖神話と位置付けられてきたアラン・ゴア神話について分析し、この神話はチンギス・ハーンの祖先の系譜に見られる血縁の断絶を解決すると同時にチンギス・ハーンとその一族は「天神の子」であることをより強く示す役割も果たしていることを明らかにした。つまり、アラン・ゴア神話は祖先の靈すなわちバトチ・ハンを産ませた蒼き狼という獣形靈によって妊娠するというシャマニズム的観念に立脚して、アラン・ゴアに獣形靈たる蒼き狼というオンゴンが憑依して産まれたボドンチャルらが、平民の種ではなく、バトチ・ハンの血統を引く者たちであり、「天神の子」とであると正統化しているのである。以上によって、チンギス・ハーンとその一族が『モンゴル秘史』において出自的に「天神の子」とされていることがわかったが、「天神の子」という概念はなぜ、それほど重視されていたのであろうか。それは、モンゴル人の最も信じるザヤー（Jayay-a）観念と関係する。

第七章の「モンゴル人の精神世界におけるザヤー観念」では、このザヤーについて分析した。ザヤーとは、和訳すると「天神に賜った靈魂」とであるが、宇宙三界観に基づくシャマニズム的観念であることを明らかにした。つまり、宇宙三界観というのは、漠然と宇宙を三つの階層に分けているだけではなく、天上界を光明と善靈、地上界を人間と動植物、地下界を暗黒と悪靈の世界と信じる観念なのであり、彼ら遊牧民にとって、この世界観が善と悪の対極概念とそれに関わる保護と破壊、幸福と災難の由来を解釈

する根拠となり、善人と悪人を見分ける基準となったと考えられる。このような考え方がモンゴル人のザヤー観念の土台となり、全てをザヤーの善し悪しや有無によって説明するシャマニズム的世界観が形成されたのである。モンゴル人の「天神の子＝ハーン」という考え方は、この世界観の上に成り立ったのである。序でに、この章においてモンゴルのハーンとシャマンの問題について分析し、「君主＝シャマン」という図式がモンゴルの王権には適用されないことを明かにした。

以上の分析に基づいて本論の出発点となる三つの問題、すなわち序論で提示された「天」、「天の子」、「君主＝シャマン」などモンゴル王権の本質に関わる問題について、次のような結論を得た。

筆者は、〈基本構造〉における要素Ⅰが宇宙三界観に基づく天神と天上界にあたることを明らかにしたが、このことによって、全ての諸神話が、要素Ⅳである始祖・シャマン・支配者・英雄の出自を要素Ⅰの天神と天上界に求めてきたことの意味が理解可能となる。すなわち、何れの神話も、要素Ⅳを構成する始祖・シャマン・支配者・英雄が「天神の子」であることを語るものに他ならないのである。言い換えれば、宇宙三界観に基づくシャマニズム的世界観が、神話を有する諸族に対して「天神の子」の誕生に関する「真話」を作らせ、真実として語り続ける力を与えたのである。ザヤーを信じる当該モンゴル社会においては、蒼き狼神話の「上なる天神よりのザヤーを持って生まれた蒼き狼である」という一句に「ザヤー」という言葉が使われていることに象徴されるように、チンギス・ハーンとその一族が「天神の子」と信じられたのである。遊牧社会の人びとは、悪魔や外敵のもたらす災厄を防ぐために「天神の子」の誕生を渴望し、その保護を期待する。そのため、天上界の天神に出自を持つとされる「天神の子」たちがハーンやシャマンとして認められたのである。従って、チンギス・ハーンとその一族は漠然とした「神の子」でもなければ、中国の天子に倣った「天の子」でもなく、まさにシャマニズム的世界観を土台とする遊牧社会そのものが産み出した「天神の子」といえるのである。

遊牧社会が「天神の子」を必要としているからこそ、「天神の子」たる彼らはその権力と権威を維持するため、自分たちが「天神の子」たるザヤーの持ち主であることを常に意識し、強く主張しなければならなかった。また、「根源」というものが格別に重視されたので、チンギス・ハーンとその一族、そして氏族シャマンは、その「根源」を天神に求めることによって自ら権力と権威を正統化したと思われる。そしてチンギス・ハーン一族にはやがて、天神に由来する同じ「根源」を持つ、ザヤーのよい成員が徐々

に増え、「ツァガン・ヤス」或いは「ハーン・ヤス」と呼ばれる貴族層を形成するに至ったのではないかと思われる。彼らは天神に「根源」を持つ一族として、モンゴルの人びとに受け入れられていた。だからこそ、彼らは貴族として最近まで生き残ってきたのである。モンゴル人は、貴族のことを現在も「根源を持つものたち」(iJayurtan)と称しているが、このことは、筆者がこれまで論述してきたことを裏付けるものである。

このように考えると、チンギス・ハーンとその継承者であるハーンたちが自らを「天神の子」や「天神の使者」などと称し、全世界の統治権は天神がチンギス・ハーンとその一族に授けたものと世界に対して宣伝し、人々の服従を呼びかけたことは、まさに北アジア騎馬遊牧民族のシャマニズムにおける宇宙三界観とそれに伴う「天神の子」思想に基づく行動であると考えられる。つまり、彼らは遊牧諸族を麾下に纏め得た王権観を世界に対して喧伝し、その王権観に基づいて行動していたのである。

チンギス・ハーンをはじめ、モンゴルのハーンたちがシャマンを重要視していたことは疑いようのない事実である。しかしそれは、あくまでもハーンたちが天神の指示、支持、加護を受けるためであった。ムンケ・ハーン(Mönke qayan)の言葉を借りると、シャマンは天神がモンゴルに与えたもうたものであり、安穩に暮らすためにシャマンの告げるままに行動しなければならなかったのである。天神の存在を信じていたモンゴルのハーンたちは実際、シャマンの告げるがままに行動していた。これには二つの理由が考えられる。まず、モンゴルのハーンたちは自らを「天神の子」と確信し、天神の指示に従わなければ、彼らは天神の加護を得られず、その行動も失敗に終わると考えていたためである。次に、天神を崇拜しなければ、彼ら自身のみならず、ウルス(国=人々)の安全と繁栄が保障されないと考えていたためである。このことは、元朝時代の大ハーンたちが帝国の安全と発展のために天神に祈ることを仏教、道教、キリスト、イスラムの教徒に命じて発令した文書の内容によって確認できる。つまり、ハーンは単にシャマンそのものを重視していたのではなく、天神と交渉できるとされるその霊力を利用していたのである。彼らにとって、天神と交渉できると見なされる者は全て「告天人」と考えられ、チンギス・ハーンが長春真人に「テブ・テングリ」というシャマンの尊称を授けたことはその実例の一つであると思われる。従って、モンゴルのハーンたちは「天神の子」であり、王権の持ち主ではあったが、シャマンではなかったのである。

以上の分析によって、筆者は、モンゴル王権の本質がシャマニズム的世界観を土台とする「天神の子」思想にあると考える。この思想は、モンゴ

ル王権においてモンゴルの最後の大ハーンであるリグデン（Ligden）まで一貫して認められると考えられる。そしてその後、モンゴルの人びとが17世紀に自らの正当な支配者であると認めた後金のホンタイジを「天神の子」と信じ、彼を自分たちのボグダ・ハーン（Boγda qayan）と認めていたという歴史事実を考えたならば、「天神の子」思想がモンゴル人の王権観にとって如何に重視されていたかがわかるであろう。